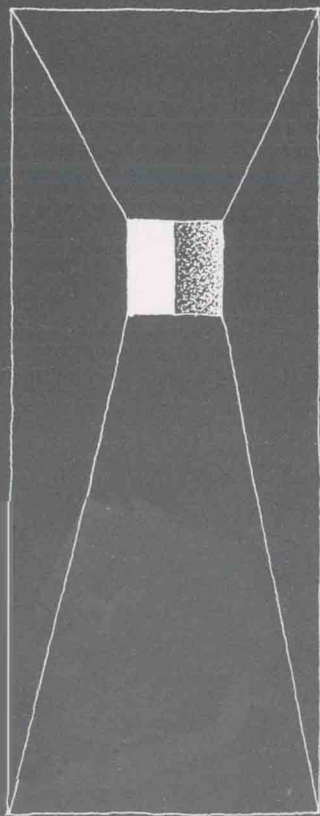


奥様こんにちは

鈴木 健二

主婦と生活社

鈴木 健二



主婦と生活社

〔著者略歴〕

鈴木 健 二

東北大学卒業。昭和27年NHK入局。社会派、芸術派としてテレビに次々と新分野を開拓。「人を動かす話術」ほかの著書で、評論、随筆にも活躍。

住所 東京都杉並区阿佐谷北1の38の2

奥様こんにちは

発 行 昭和43年 8 月10日 第 1 刷

著 者 鈴木健二

発行者 遠藤左介

発行所 株式会社 主婦と生活社

東京都中央区京橋 3 丁目 5 番地

電話東京(567)0311

振替東京 36364

印刷所 太陽印刷工業株式会社

製本所 板倉製本

定 価 360 円

検印廃止

落丁本・乱丁本はおとりかえます。

© K. Suzuki 1968 Printed in Japan

はじめに

屈折した太陽光線が水に激しく突きささってしようと、やるせなく波がうねってしようと、雲との境が分明でなかうと、私は海を見ているのが好きだ。

雪が覆ってしようと、青い風が渡ってしようと、はんの木が鋭く淋しく立ってしようと、私は田の畔を歩くのが好きだ。

そして、高速道路にタイヤが快く滑り、二十世紀後半が神のいます天国を犯すほどの高いビルに象徴され、世界の料理が胃袋を満し、妖しき人情風俗が七色の光の中でなまめかしくしなだれかかろうと、私は都会が好きではない。

しかし、私は都会に住まなければ生活してゆけない。多くの人々と、きゆうくつな空の下ですれ違い、会い、話し、別れなければ生きていられない仕組みが私に枷をする。

都会の喧噪のうとましきの中をみんなが歩く。私もいらいらと歩く。「よう」と声がかかる。ぎくりと振り返る。

やあ

さようなら

こんにちは

じゃ、また

しばらく

元気で

バーイ

街の中で戦争中からさまざまなことをしてきた。

驚き、裏切り、正義、敗北、悲しみ、驕り、どん底、痛さ、片思い、刃物、辛抱、札束、醜さ、怒り、別れ、偶然……。その中からここに収めたものは、放送、ことにいま担当している「こんにちは奥さん」に多少なりと関係のある数編だけである。その他のものはまた何かの機会が与えられればまとめることもあるだろう。

ただノンフィクションが常に当面する困難はプライバシーの侵害である。ここに登場する人達も、名前、日時、場所、場面設定に事実と多少相違していることがあるがご了承願いたい。

一九六八年八月

鈴木健二

目 次

都会に死んだ浜辺の子	6
小さな新聞記事	27
嫁と姑と家計簿と	45
実戦・虚戦	61
編集長との対話	82
ダンプとコマーシャル	110
非行少女ミキ	142
三人だけの結婚式	162
老婆からの投書	208
離婚の系譜	227
ここに政治を	249

装幀／関敏男

カメラ／磯間富栄・倉田耕一

奥様
こんにちは

都会に死んだ浜辺の子

見下ろす海からの照り返しがまぶしいのであろうか、眼を半分閉じて、彼女はもう小一時間も草の上にうずくまったままだ。海風になぶられた髪が首筋にまつわりついても、何のくすぐったさも感じないのだろうか、いや、まだ彼女の神経は脳にうまくつながっていない部分があるのだろうか。

私は後ろにある小さな墓を振り返った。入江を抱くように突き出ているこの岬の先端に墓が点在していて、そのいずれもが、自分が生れ、育ち、死んだ、故郷の海を懐かしそうに見下ろしているのに、この小さな墓だけは、背後に立ったひよろ長い松の木が天に向ってやせた手をあわれっぽく伸ばしているせいでもあるだろうか、海を眺めていつも涙を落としているように見える。

「そろそろ二年になりますねえ」

私は何度となく繰り返した言葉をもう一度口にした。そして、ちらっと彼女を見た。う

なすきもしなかった。ただ涙が一粒ぼろりと膝の上に落ちたのが、返事と言えば返事だった。

「あなたがはじめて私に声をかけたのは入江の向う側に見える網干場でしたねえ」
生気のない顔が深くうなずいた。

「あの時、私はあなたをもっと強くひきとめるべきだった。残念に思っています」

「いえ、あたしが……」

のどの奥のかすかな声が草を渡る海風にかき消された。

近くの町の夏期大学へ講演に招かれたあと、私独特の、異常なまでの取材癖から、近隣の農村を歩き、漁村を回った。農村では農業構造改善事業がどの程度進んでいるかを知らなかったし、漁村では、魚を獲る漁業から、魚を殖やす漁業への転換が漁村の人達の意識をどのように変えているかを調べたかった。もう一つは、はじまったばかりの「こんにちは奥さん」の農漁村での受取られ方も知りたいと思っていた。私は多分全然見られていないだろうとかねがね考えていたのだが、案の定、農村ではその頃、十人に一人も番組の名前さえ知らなかった。

もっとも、私はNHKに入って十六年になるが紅白歌合戦という大晦日の番組を一度も

見たことがない。他の仕事に追いまくられているからだ。よそへ講演に行っても、たいていの質問には答えられるが、何とかという番組でこれこれのことをしていたがどう思うとか、連続ドラマはあのあとどうなるのかと聞かれると全く困ってしまう。番組など見ている暇がないし、本を読んだり原稿を書いたり、資料を調べたりするのに、家の中のテレビは雑音以外の何ものでもないから、紺屋こやの白袴はくもいいところで、テレビやラジオはよほどでないといけない。

だから、砂だけが濃く焼けついていて、夏の日盛りの中で、海も船も網も息をひそめている砂浜で、突然、

「あのう、〃こんにちは奥さん〃の鈴木さんですか」

と、あじの干物をぶら下げた三十そこそこの婦人に話しかけられた時には、意外な気がしたものである。

「毎日見せていただいています」

日焼けしていたが、頬かむりをとった顔は、目鼻立ちの大まかに整った美人だった。

「ありがとうございます。よくごらんになれる時間がありますね」

「はあ、うちは遠洋に出ておりますので。この辺はだいたい近海が多いのですが、うちは代々遠洋だもんで」

「ご主人は何日ぐらい」

「一度出ると二か月は少なくともかかります。その間は割合暇がありますので」

「それで番組を見る時間があるわけですね。どんな問題の時が面白いですか」

「はあ、四年生の男の子がいますので、教育についての話題に興味があります」

少し息がはずんでいるのは、多分、私の姿を見かけて小走りに来たせいでもあろうが、しっかりと話しぶりだった。

「それで、あのう……」

「はあ」

「一つお聞きしたいことがあるんですが」

「はあ、何なりと」

「でも、暑いのに」

「構いません、あの船の陰へ参りましょう」

私が砂の上を歩き出すと、彼女は藁草履でとっとと焼けた砂の上を走って行き、船底を支えている材木の上の砂や塩を手でぱつぱつと払うと、頬かむりの手拭いをそこへ敷いた。

「あ、そんなことをなさらないでも」

「いえ、こんなところで、どうもすいません」

私は手拭いを返して材木に腰をおろした。

「ほんとに、鈴木さんとお話し出来るなんて光栄です」

「光栄？」

私は少々でれて、どぎまぎした。純朴な人だと思った。

「わたし、横田恵美と申します」

「じゃあ、改めて私も、鈴木です。お話って」

「はい、実は教育のことなんです」

横田恵美が言うのはこうだった。

テレビを見ていると、都会の奥さんはとても教育に熱心だ。村では考えもつかない。教育がおおざりにならないように心がけてはいるが、都会の奥さんのように、子供の将来の設計まで考えての教育はしていない。

それに加えて、漁村の生活は漁獲高や天候に左右されて不安定であり、主人とも相談して、子供には漁業を継がせないようにしようと思っている。そうなると勢い都会でサラリーマン生活を送ることになるが、教育に現状のような都会との差があったのでは、将来とも太刀打ち出来そうにもない。どうせ主人は一年のうちで大部分は漁に出て不在なのだ

から、いっそのこと私が子供を連れて東京へ出てみようかと思うがどうだろうかと言うのであった。

私は家庭の事情で村を離れるのならばやむを得ないが、子供の教育だけのことで都会に出るのは愚の骨頂であると答えた。

「こんなに恵まれた自然の中で子供を育てられるなんて羨ましい限りです。教育に対する母親達の熱意の持ち方は異常です。マスコミで知らされるいわゆる教育ママの風潮に惑わされてはいけません。今の教育のあり方や方法を本当に知っていて、正しい教育をしている親などほんの一握りもないと思います。大部分の親は教育はわからないというのが本音ではないでしょうか。知識をつめ込むだけが教育ではありません。どこか名の知れた学校へ行って、安定した会社へ入って、せいぜい課長さんになれば。そんなところに今の親の教育目標があるように思えてなりません。ケチな話です。一般的な知識などは標準だけあればいいし、そこへ自分で努力をして専門的な知識をどんどん注ぎ込んで行けばよいわけです。専門知識は何も学問だけではなくて、たとえば漁に出れば、どんな状態の時には大漁になるとか、天候がこういう風に変れば危険であると言った問題を単に経験的なカンだけではなく、科学的に裏づけようとする努力も専門的知識です。人にはそれぞれの天分や才能があります。おたくのお子さんが社会に出る頃には、学歴など何の役にも立た

ないでしょう。その人の能力が評価され發揮される時代です。問題はその人が目標を自分でしっかりと見きわめることと、十分な健康と意志を持つことです。最近、日本の一流企業は、何々大学を優秀な成績で出たという人を採用したがりません。確かに知識はあるが、意志が弱く、人と人との関係がうまく保てない、早く言えば小さい頃からの無理な教育がたたって、肉体と精神のバランスがとれずに、ボロボロの雑巾のような人間になってしまっているからです。誤った教育観や見栄にとらわれた教育方法ほど子供を不幸にするものはありません。それよりもこの青い海で思う存分泳がせ、緑の山をかけめぐらせることの方が遙かに幸せです。学校などどこを出てもいいのです。要はその人が、社会へ出てどのように自分を花咲かせるかです。子供さんを信ずることです。学校の今の勉強で十分です……」

風が出て来て、海鳴りの音が少し高くなりその男性的なリズムが私を酔わせたのかも知れない。私は熱い砂を握りしめて一時間近くも話した。彼女は全身を固くして聞き入っていた。次の上りの列車で帰京しないと、約束していた仕事に間に合わないからと私が立ち上がろうとすると、彼女はまるで座敷の中でもするように、砂浜にべったりと手をついて丁寧におじぎをした。彼女の律気さよりも、こんな素朴な人の心までも侵蝕している現代の誤った教育の風潮に私は激しい憎悪を覚えた。

東京に学校群制度が行なわれようとする時に、当時の小尾^{おび}庸雄^{とらお}教育長を囲んで二、三度母親達との話し合いを「こんにちは奥さん」で放送した。もちろん、教育に過渡期があつてはならないというのは私の持論である。この制度の是非はあと数年の結果を見ないとわからないが、その放送のあと、東京のいわゆる有名高校がこの制度に反対の意志を表明した。子供達の進学意欲を妨げる、あるいはエリート教育は必要だと言うのがその骨子であつた。そしてこれら有名校と自称する学校の教師や父兄から、私のもとに電話や手紙が殺到し、私はこれらの人々に屢々面会を強いられた。

放送においては私は司会者として中立を守らなくてはならない。しかし、それにも出来得る限り、という条件がつく。時折私は自分が司会者であることを後悔することがある。私自身その問題について意見がある。色をつけようとすれば口先一つで容易に出来るし、視聴者には放送の進行中には気づかれないが、見終つたあとに片寄つた意見の方を印象づけることなど、十五年以上も放送の仕事をしていると、小手先の技術で簡単に出来てしまう場合もなくはない。

しかし、放送を離れて個人の立場になれば意見は勝手である。正直に言つて、私は自称有名校の教師や父兄の論拠の薄弱さと見栄に閉口した。将来の社会におけるエリートとは何なのか。時代と将来の見通しに即応した教育のあり方、学校の伝統とは何かなどについ

て何の意見も無いのである。ただ、うちの子はよその子よりよく出来るのだ。やがて東大へ行くのに、出来の悪い子と一緒にされては困る、だけをつらつらと述べるだけであった。私の友達には、パンと水だけで飢えを凌ぎながら絵を描いている夫婦がいる。苦勞が報いられてグランプリをとってフランスへ行った。相変らずのひどい貧乏だが、私は二人に会っていると、この世の中にこんな幸福があるのかと疑いたくなるほどに幸せが輝いている。社会奉仕に打ち込んでいるものもある。南米の荒地を開墾に行ったやつもある。何の能力もなく、力強い意志も無い連中がサラリーマンになるのだ。そして子供を生んで家を建てて、一日延ばしに寿命を長らえて、やがてのことに、おれは何のために生れて来たのだろうと後悔しながら死んで行くのである。彼がこの世に生きていたあかしは、彼とよく似た顔をした子供が一人二人ただけである。

人にはそれぞれの生き方がある。類型の中で暮す人間がもっともくだらないのである。類型の中でぬきんでても、結局、類型は類型でしかない。すぐれた天分のある人間には学校教育など不用である。松下幸之助さんのような秀れた実業人、美空ひばりさんのような大衆のアイドルを見れば一目瞭然である。真のエリートとはその道その道にすぐれた生き方をした人を言うのである。

しかし、教育に熱心なようで教育に無知なある種の母親はそうは考えない。その証拠が、